

今日のみ言葉 280 「わたしは常に 主をわたしの前に置く」

2018.05.09

私は常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右におられるゆえ、わたしは動かされることがない。

このゆえに、わたしの心は喜び、わたしの身も安らかである。(詩篇16の8~9より)

I have set the LORD always before me: because he is at my right hand, I shall not be moved.
Therefore my heart delights, My flesh also will rest in hope.

私たちは、日々何を前に置いているだろうか。小さな子供であれば、母親であり、また少し成長すれば、友だちや遊び、飲食のこと、さらには成績やスポーツの好成績など...そして社会人になると仕事のこと、上司のこと...等々。そして老年になれば、健康のこと、将来のこと...等々。また、何らかの芸術や製作、研究などに専心している人たちは、その方面のことが常に前に置かれているだろう。

しかし、重い病気となれば だれでも自分の体の癒しのことが日々忘れることができなくなる。日夜その病気が快方に向かうようにとの願いで日々が過ぎていくであろう。

そうした状況においても、この聖書に書かれたことー主を常に前に置くーが可能となってきた人たちが数知れずいる。いかなる状況にあっても、神のことを前におくー神のことを思うということである。

神のことーそれはいろいろな意味を含む。神の全能の力、またその愛、そして清さ、真実...等々、そして最終的にはその愛ゆえに、すべてをよきにしてくださるということ、たとえ死が迫ってきても、その死さえも越えて、神のところに導いてくださる。そしてそこで永遠の平安と、命が与えられる。

そうした希望をいつも前に置く。

最も大切なものーそれゆえに永続するものは、信仰、希望、(神の)愛。(新約聖書 コリント13の13)

いつも神を前に置くとは、そのようにこの三つをいつも前に置くこと、心の中心に置くことになる。

神は全能であるゆえに、いかなる悪の力にもうち勝ち、死の力にさえも勝利して、信じる者を、神のみもとに復活させてくださる。

そのような思いに導いてくださるゆえに、この詩の作者が告白しているように、根本的には動かされることがない。もちろん弱い人間のことゆえ、一時的には動揺もすることがあるだろう。しかし、そこからまた神を静かに前に置くように導いてくださる。人間の目標とすべきありかたが、このように数千年も昔から、明確に示されていることに驚かされる。



キンバイソウとは、金色に咲く梅のような花ということから名付けられました。この写真は、伊吹山の頂上付近に群生していたものです。

周囲の青くかすんだ山々を見下ろし、雲の海をも眼下にしつつ、山頂部に咲く姿は、草花にはめずらしい力を感じさせるものがあります。

高山に咲く花々は、短い時期に一斉に咲き、概して美しいものが多く、かつ高山ゆえの清澄な大気と、山々を見下ろす高地にあるゆえの、風雨、風雪に耐える力を感じさせ、さらに、その多くは、一部の人たちしか登ることができないゆえに、静けさの中にあり、誰も見るものもないところでも、その美しい姿を表しているところにも心惹か

れるものがあります。

伊吹山とは、滋賀県の北部と岐阜県の境にある山で、標高1377m。高さはそれほどないにもかかわらず、数多くの高山植物とみなされる花々がさいています。

私は、40年以上前に、紀伊半島の大峰山系を南部の熊野の方まで、7月に1週間近くかけて奈良の吉野山から縦走したことがあります。高山植物と言えるものはほとんどみられず、また全体的に雨の多い森林地帯なので花々はわずかだったのを思い出します。（そのかわり鳥類が多く、コマドリの高いさえずりを初めて聞いたのもこの大峰でした。）

また、鳥取の大山や四国の剣山、石槌山やそれらに通じる縦走路、あるいは九州の山々も、高山植物といえるものは少ないのです。その点から見ても伊吹山は高山植物には、特別に多くの多様性ある植物が自生しています。

樹木や草花は、黙してその力や美を表しつつづけています。そして神により創造されたものゆえに、神の無限の英知がそこに宿され、私たちに語りかけています。

静まれ、そして見よ、聞け！...という呼びかけが聞こえてくるようです。

（文、写真ともT.YOSHIMURA）